

縄文時代の人びとは、自分たちと似たような姿や行動をするサルに親しみを感じるいっぽうで、サルが深い山や暗い森に住んでいることから、特別な思いをもっていました。そのうち、サルに対する思いは、山の神さまの使いやウマの守り神になるなど、信仰と結びつきました。サルはかしこく芸達者なため、儀式やお祭りなどで舞ったり演技をしたりもしました。それは今でも「猿まわし」として楽しまれています。



ウマといっしょに飼われているサル

石山寺縁起絵巻（模本） Illustrated Legend about the Origin of Ishiyamadera Temple (Copy)
サルはウマの病気を治すことができると信じられ、馬小屋で飼われたり、ウマの守り神として大切にされたりしました。700年ほど前の貴族の生活を知ることができるこの作品にも、馬小屋につながるサルが登場します。

石山寺縁起絵巻とは

滋賀県にある石山寺の成り立ちと、本尊である如意輪観世音菩薩が行なったご利益や奇跡を描いたものです。石山寺は8世紀半ば・奈良時代に建てられたお寺で、清少納言の「枕草子」にも登場します。本尊は聖徳太子が持っていたとされる秘仏で、33年に一度と、天皇即位の時のみ公開されます。



三猿 仏画図集（拡大）

三猿

三猿といえば日光東照宮の神馬の厩を飾る「見ざる、言わざる、聞かざる」の彫刻が有名です。目、口、耳をふさぐ三びきのサルというモチーフは、日本だけでなく世界中で見られます。起源は明らかではありません。日本では10世紀に、比叡山延暦寺の僧良源が、世の中をうまく渡っていくための処世訓を歌った「七猿歌」のうちの一句「見ずきかず言わざる三つのさるよりも 思わざるこそまさるなりけれ」によって広まったともいわれています。

「ラーマーヤナ」に登場するハヌマーン

「ラーマーヤナ」はインドの大長編叙事詩で、ヒンドゥー教の聖典にもなっています。そのため、インドのみならず東南アジアの国々でも広く親しまれています。物語は、ラーマ王子が誘拐された妃シーターを取りもどすために、大軍を率いて、鬼族の王ラーヴァナに戦いを挑む姿が描かれています。

シーターをさがして旅を続けるラーマは、その途中でハヌマーンと出会います。猿族王スグリーヴァが兄のヴァーリンから都を追われ、ハヌマーンは、スグリーヴァ王に付き従っていました。出会ったラーマたちに助けを求め、ラーマがヴァーリンを倒し、スグリーヴァは王に返ることができました。今度はラーマがハヌマーンに、シーターと一緒にさがしてもらおうよう頼みます。ハヌマーンは、シーターが海を越えた敵の城にいることをラーマに知らせ、猿族を率いて戦いました。



（側面）

サルの神さま ハヌマーン

ハヌマーン立像

Standing Deity Hanuman

東南アジアで栄えたアンコール朝では、軍の力強さを表すために、インド生まれのサルの神さまハヌマーンを、軍の旗の飾りにしました。



アンコール・ワット遺跡

インド神話に登場する「ハヌマーン」は、サルの神さまです。赤い顔で体が大きく、長いしっぽをしています。その雄叫びは雷の音のようであったといわれています。姿も自由に変えることができ、空も飛べました。

天と地をつくるハヌマーン

乳海攪拌の二（神猿ハヌマーン）
アンコール・ワット廻廊第四壁

The Churning of the Ocean of Milk II
(The Monkey-god Hanuman) from Outer Wall Mural No.4 at Angkor Wat

ヴァースキという大きなヘビの神さまを山に巻き付けて、天と地をつくっている場面です。もともと、この物語にはハヌマーンは登場しませんが、アンコール朝の人びとにとっては、親しみのある神さまだったのでしょう。

アンコール・ワット

アンコール・ワットはカンボジア北西部に位置するアンコール遺跡のひとつで、現在、ユネスコの世界遺産にも登録されています。12世紀前半、アンコール朝のスーリヤヴァルマン2世が、30年を超える歳月を費やして建立したヒンドゥー教の寺院です。アンコールはサンスクリット語で「王都」、ワットはクメール語で「寺院」を意味します。廻廊の壁面には、乳海攪拌とよばれるヒンドゥー教の天地創造神話や、インドの叙事詩「ラーマーヤナ」などが表わされています。



サルのひろば

親子のギャラリー

東京国立博物館
平成館企画展示室
4.17 TUE
5.20 SUN

ようこそ「サルのひろば」へ

東京国立博物館（トーハク）では毎年この時期にひとつの動物に注目し、その動物が表わされたさまざまな作品をご覧いただく展示を行なっています。今年のテーマは「サル」です。

人びとはサルをどのように表わしてきたのでしょうか。今回は、四つのテーマで紹介します。

- 1. 日本人はどのようにやってサルをリアルに描いてきたの？
- 2. 日本人はサルにどのようなイメージをもっていたの？
- 3. サルは山の神さまの使いでもあり、ウマの守り神でもあった！
- 4. インド生まれのサルの神さま

トーハクの「サルのひろば」にはいろいろなサルがいます。ニホンザル、テナガザル、さらに神様になったサルもご覧いただけます。彼らは日本やアジアの人びとが作った作品の中で生き生きとしています。

動物園で見るサルとは少し違う美術の中のサルたちをご覧ください。

書いてあることを参考に作品鑑賞をしていただければ幸いです。

Family Gallery: Monkeys in Art
Tokyo National Museum, Heiseikan, Thematic Exhibition Room
Tuesday, April 17 – Sunday, May 20, 2018

This exhibit looks at how people represented monkeys in art. It focuses on Japanese macaques, often called “snow monkeys,” and long-armed gibbons, through four topics:

- 1. How did Japanese people create realistic paintings of monkeys?
- 2. What kind of ideas are behind artworks that show monkeys?
- 3. In Japan, monkeys were mountain gods and protectors of horses.
- 4. There is a monkey god in Indian mythology.



上野動物園のサルたち



テナガザル（公財）東京動物園協会）



ニホンザル

動物解説員のお話

「猿図」は枝をしっかりと握ったり、虫を軽くつかんだりする前あしの使い方が、ほんもののサルそのままです。また、3びきそれぞれの表情などからも、ニホンザルの生態を、とてもよく観察して描かれていることがわかります。（恩賜上野動物園 小泉祐里）

中国から伝わったテナガザルの描き方

猿猴図（模本）Gibbon (Copy)

1本1本の毛並みや足の爪まで、ていねいに墨で描かれています。作品に表わされたテナガザルは、手足や爪が黒く、顔と毛の違いがはっきりとわかるように白い縁で描かれ、目と鼻と口が小さく中央に寄っているのが特徴です。



日本美術にみられるサルは、おもにニホンザルとテナガザルの2種類です。ニホンザルの場合は、せまい額、鼻の下や顎の長さ、短い手足、短いしっぽや尻だこといった特徴がよく表現されています。特に手足の表現として、母指対向性（親指とほかの4本の指が離れ、指同士を向かい合わせてものがつかめる）という霊長類の特徴を、ていねいに表わしているものが数多く見られます。

テナガザルは、もともと日本には生息していません。鎌倉時代に、中国から禪宗という仏教とともに、中国の画家が描いたテナガザルの絵が伝来し、日本ではその絵がお手本となりました。

ほんものそっくりのニホンザル

猿図 Monkeys

ニホンザルの親子が檜の木に登る姿が描かれています。親ザルは、捕まえた蜂を見つめています。墨で描かれていますが、顔や耳にはほんのりと朱が使われています。ふわりと表わされた毛や顔の表情は、ほんもののニホンザルにそっくりです。

ニホンザルには、人びとの暮らしと結びついたさまざまなイメージがあります。たとえば、「吉祥（良いことがおこる兆し）」の意味をもつサルの作品が、平安時代ごろから作られるようになりました。そのうち、人間のよくない行ないをサルにたとえる表現も生まれました。

桃にすわるサル

桃に猿水滴 Water Dropper

桃は結婚や安産のおめでたいしるしをあらわす果物で、サルと桃の組み合わせには長寿や出世の願いがこめられています。

たくさんのサルがデザインされた刀の鐔

千疋猿透大小鐔

Sword Guards for *Daisho* (Pair of long and short swords)

日本ではサルの鳴き声「キキッ」に「喜」の字を当てて、サルは縁起のよい動物とされました。たくさんのサルを組み合わせたデザインは「喜々猿」といって喜びを重ねる縁起物、厄除けとして人気がありました。

作品リスト

通番	名称	作者・製作地・出土等 / 材質・技法等 / 時代 / 備考	列品番号
1	群猿図（模本）	模者不詳 紙本墨画淡彩 江戸時代・19世紀 原本：森狙仙筆 江戸時代・文化2年(1805)	A-4735
2	猿図	森狙仙筆 絹本着色 江戸時代・19世紀 亡九鬼隆一郎 相続財産法人寄贈	A-12441
3	猿猴図（模本）	狩野勝川院<雅信、素尚斎>模写 紙本墨画 江戸時代・慶応3年(1867) 原本：相阿弥筆 室町時代・15～16世紀	A-1903
4	◎馬猿猴図 （唐絵手鑑「筆耕園」の内）	趙雍筆 絹本着色 中国 明時代・15～16世紀	TA-487-28
5	百猿図	狩野探信<守政>筆 絹本着色 江戸時代・18世紀	A-253
6	染付猿絵水指	一方堂窯 陶製 江戸時代・19世紀	G-984
7	井桁釜	大西定林作 鉄铸造 江戸時代・17世紀	E-13348
8	桃に猿水滴	銅铸造、彫金 江戸時代・18～19世紀 渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20643
9	瓢箪に猿水滴	銅铸造、彫金 江戸時代・18～19世紀 渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20634
10	桃に猿水滴（猿猴捕月）	銅铸造、彫金 江戸時代・18～19世紀 渡邊豊太郎氏・渡邊誠之氏寄贈	E-20642
11	千疋猿透大小鐔	矢上光広作 鉄地透彫 江戸時代・19世紀	F-12702
12	猿桃果牙彫根付	象牙製 江戸時代・19世紀	H-802
13	猿桃果木彫根付	木製 江戸時代・19世紀	H-974
14	猿鯨木彫根付	木製 江戸時代・19世紀	H-1000
15	猿印籠牙彫根付	象牙製 江戸時代・19世紀	H-744
16	面持猿木彫根付	木製 江戸時代・18世紀	H-855
17	猿の手相	奥村政信筆 細判、漆絵 江戸時代・18世紀	A-10569-3495
18	意馬心猿図	柴田是真筆 紙本着色 明治時代・19世紀	A-1078
19	浮絵桃太郎鬼島凱旋之図	沢雪嶺筆 横大判、錦絵 江戸時代・19世紀	A-10569-5600
20	猿蟹	磯田湖龍齋筆 中判、錦絵 江戸時代・18世紀	A-10569-3981
21	通俗西遊記	月岡芳年筆 大判、錦絵 江戸時代・慶応元年(1865)	A-10569-5588
22	狂言面 猿	元休作 木造、彩色 江戸時代・18世紀	C-200
23	狂言面 猿	木造、彩色 室町～安土桃山時代・16世紀	C-1145
24	狂言面 猿	木造、彩色 江戸時代・19世紀	C-181
25	猿形土製品	埼玉県さいたま市岩槻区 真福寺貝塚出土 土製 縄文時代(晩期)・前1000～前400年	J-23228
26	骨器	茨城県行方市出土 ニホンザル 大腿骨製 縄文時代(後～晩期)・前2000～前400年	J-22618
27	江戸名所図会	齋藤長秋著 江戸時代・天保7年(1836) 徳川宗敬氏寄贈	QB-10360
28	仏画図集 巻14	紙本木版 江戸時代・17世紀	A-1386-14
29	石山寺縁起絵巻（模本）巻5	狩野晏川<貴信>模写 紙本着色 明治時代・19世紀 原本：高階隆兼他筆 南北朝時代・14世紀	A-1660-5
30	猿曳図（模本）	狩野勝川院<雅信、素尚斎>模写 紙本着色 江戸時代・ 天保10年(1839) 原本：狩野探幽筆 江戸時代・17世紀	A-3865
31	猿にさんばさう	魚屋北溪筆 色紙判、摺物 江戸時代・19世紀	A-10569-6066
32	ハヌマーン立像	カンボジア 青銅 アンコール時代・11世紀	TC-763
33	乳海攪拌の二（神猿ハヌマーン） アンコール・ワット廻廊第四壁	拓本 掛幅 昭和時代・20世紀	P-2941-10
34	ラーマヤーナの一（猿軍の戦闘） アンコール・ワット廻廊第八壁	拓本 掛幅 昭和時代・20世紀	P-2941-21

◎は重要文化財



親子のギャラリー サルのひろば

2018年4月17日発行
執筆：勝木言一郎・神辺知加・小島有紀子、撮影：藤瀬雄輔・西川夏永・長谷川暢子 ほか、翻訳：ミウォシュ・ヴォズニ（以上、東京国立博物館）/ロゴデザイン：RinRinPress林紀江/デザイン・制作・印刷：精興社/編集：東京国立博物館出版企画室/発行：東京国立博物館

©2018東京国立博物館



子ザルのお面

狂言面 猿 Kyogen Mask

日本の伝統芸能のお芝居・狂言で使われたサルのお面です。きょろりと丸い目をしたこのお面は、狂言の「鞆猿」のお話に登場する子どものサルにぴったりです。この役は初めて舞台上に立つ子どもが演じることがあります。



中国で描かれたウマに乗るサル

◎馬猿猴図（唐絵手鑑「筆耕園」の内）

Gibbon on a Horse (From the *Hikhoen* Albums of Chinese Painting)

中国人は昔から「早く出世しますように」という願いをこめて、ウマに乗ったサルを描きました。中国語で、「ウマに乗って」が「すぐに」、領土を持つ支配者を表わす字「侯」の発音がサルを意味する「猴」に、通じるからです。